

上智大学 総合グローバル学部新設

2013年に創立100周年を迎えた上智大学では、グローバル社会に貢献できる人材の育成に力を入れてきました。2015年には文部科学省の『スーパーグローバル大学創成支援』事業に採択され、新たな取り組みが始まっています。その取り組みと特徴について、総合グローバル学部の寺田勇文学部長にお話を伺いました。



グローバル人材の育成のために上智大学が行っている取り組みについて教えてください。

現在のグローバル社会が直面する種々の問題は、その複雑さを増し、ひとつの専門分野を学修するだけで解決できるものではありません。環境問題ひとつとっても、その解決策を導くにはサイエンス・テクノロジーをはじめ、経済や政治、哲学や歴史など幅広い分野の専門知識、「専門知」が求められています。

そのためには、基礎的な語学と教養の習得を持ち、より高度な教養の習得と専門分野への理解に邁進し、身につけた知を元に、自らの思考・主張を発信することが必要です。本学の創立100周年に際して掲げたコンセプトである『叡智（ソフィア）が世界をつなぐ』にもその想いが込められています。



現在本学では、文部科学省の『スーパーグローバル大学創成支援』事業採択に際して作り上げた構想である

「多層的ハブ機能を有するグローバルキャンパスの創成と支援ガバナンスの確立」の実現に向けてさまざまな取り組みに着手しています。

その中で、学生の皆さんに直接関わる取り組みの代表例を挙げると

入試関連では

- ・ TEAP 利用型一般入試の導入
- ・ 公募制推薦入試の出願資格として、国際バカロレア資格※¹を全学で導入

授業に関しては

- ・ 小さな総合大学の強みを活かした、学部間連携で実現する全学生を対象とした高度教養教育プログ

ラム※2

- ・国際機関やグローバル企業と連携した本学独自のプログラム
- ・22 言語が学べる外国語教育
- ・チュータリングなど語学の自主学習へのサポート
- ・科目ナンバリング制の導入による知の修得の効率化
- ・海外大学との共同プログラムの実施

留学などの活動に関しては

- ・48ヶ国 233 校ある海外協定校ネットワークの拡大
- ・海外でのボランティア活動やインターンシップを取り入れたプログラムの実施

といったことが挙げられます。

様々な項目がありますが、その全てはグローバル社会に貢献できる人材を育てることを目的としています。

実践と体験を通して教養を体得し、自分の周りにある世界の課題の発見と解決に取り組む。

それがグローバル人材を育てるのです。2014 年に新設された『総合グローバル学部』は特にその点を重視した特徴を持った学部です。

※1 国際バカロレア…国際バカロレア機構（本部ジュネーブ）が提供する国際的な教育プログラム。

1968 年、世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせるとともに、国際的に通用する大学入学資格（国際バカロレア資格）を与え、大学進学へのルートを確保することを目的として設置された。

（文部科学省 HP より引用：http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1307998.htm）

※2 高度教養教育プログラム「グローバル・コンピテンシープログラム」

専門を基盤とした学際的、実践的、実践的課題への対応能力を高めることを目的とした、3～4 年次の全学部生を対象とした上智大学独自のプログラム。文理の枠にとらわれない「グローバルビジネス」「国際協力」「グローバル・アクション」「グローバル・メディア」の 4 つのプログラムから選択して受講する。多様化するグローバル社会で活躍するために求められる実践的な教養を養うことが狙い。

では、総合グローバル学部の特徴について教えてください。

皆さんは「グローバルな人」と聞いて、どんなイメージを描きますか？

留学を経験し、外国語が話せ、海外で活躍できる人でしょうか。

先ほどもお話しした、複雑化の進む現代のグローバル社会においては、そのような異文化経験と外国語能力だけでは不十分。それは世界と生きるための入口に過ぎないのです。

インターネットの発達に顕著なように、物理的な距離を超えて情報が拡散する昨今では、日本にいな

ように考え、行動するかが世界に問われることとなります。

総合グローバル学部では、そんな社会で活躍できる「世界と自分を結びつけて、思考・行動を表現できる人」を育てたいと私は考えています。



そのために以下のような特徴を持った学部となっています。

1) 知の体系

国際関係論系（国際政治論領域／市民社会・国際協力論領域）
と

地域研究系（アジア研究領域／中東・アフリカ研究領域）

2) メジャー、サブメジャー・マイナー

3) 科目ナンバリング制の導入

4) 学びと体験の幅広いメニュー

それぞれについて説明しましょう。

1) 知の体系では、2つの学問分野と4つの領域を設けています。国際関係と地域研究というグローバルとローカルの双方向の視点を同時に学ぶこの体系は、他に例を見ない教育だと自負しています。世界から見た地域、地域から見た世界を知ること、真の意味でグローバルへの理解を深めることができるのです。

2) メジャー、サブメジャー・マイナーは、知の体系に関連しています。総合グローバル学部では、4つの領域から一つをメジャーとして選択します。そして他方の系から、一つの領域を選び、サブメジャーあるいはマイナーとします。これにより全学生が例外なく2つの専門分野を学修して学位を取得することになります。つまり国際関係と地域研究について、より深い理解を身につけることができるのです。

3) ナンバリング制は、知の習得を効率化するための制度です。欧米の大学で始まったこの制度を、上智大学では全学部で導入しています。講義を学修の順序やレベルを踏まえ、入門・基礎・専門・応用の4つにグループ分けし、100台から400台までの番号を振ることで、難易度を明確にしているのです。

以上の特色を活かしてグローバル社会に貢献できる人へと成長するだけでなく、総合グローバル学部では

4) 学びと体験の幅広いメニューを作って、より強くサポートしています。

留学を積極的に支援することを始め、海外を始め様々な組織でのフィールドワークやインターンシップなどを自主研究科目として自分で設定し、取り組める仕組みを作っています。

またこのほか他学部の科目履修を積極的に奨励しているほか、英語で行う授業の拡充も図り、将来的には180講座の約2割を英語で学ぶ講義とし、それらのみでも卒業単位が取得できる体制を目指しています。現在、世界において最も使われている英語で自らの文化を理解し、表現し、世界の人と議論を交わす。そういった実践と経験を通して、日本語・日本文化の大切さも学ぶことを目的としています。

総合グローバル学部では、自分が世界にどう関わっているのか、そして世界にどう関わっていくのかを、総合的に経験し、学ぶことができます。

1 学年の定員は 220 名です。5 年後には、800 名以上の学生が当学部で学び、世界へと巣立っていくこととなるのです。

最後に高校生へのメッセージをお願いします。

Men and Women for Others, with Others.

「他者のために、他者とともに」というのが上智大学の教育の根底にある考え方です。ここまで話したように、これからのグローバル社会では、個人・社会・集団への関心と関わりがないと生きていけません。大学は、そのための教養と専門知識を学ぶ場所です。

だからこそ、大学を選ぶ際には「自分がやりたいこと」を考えて欲しいですね。何も無い状態で入学をしても、やりたいことが見つかるまでには貴重な時間が多く流れてしまう。もちろん、やりたいことが大学でそのままできるとは限りません。むしろ、大学ではその是非を問い直し、挫折し、壊し、再構築することの方が多いでしょう。しかし、そうすることで、次に見つけた「やりたいこと」は社会に出て、あなたが一生をかけても良いと思える価値のあるものとなる。

ぜひ、誰のために、誰とともに学び、生きたいのかを考え、そのために最上の選択であると思える大学に挑戦して欲しいですね。

インタビューに答えてくれた方



■ 寺田勇文先生

総合グローバル学部
学部長・教授

同志社大学卒業後、1970年代末に国立フィリピン大学大学院に留学、フィリピンの社会と宗教について学ぶ。3年半のフィリピン滞在時には、農村部に1年定住してフィールドワークを行う。上智大学外国語学部教授、同学部長を経て、2014年4月より総合グローバル学部教授。専門は文化人類学、フィリピン研究。2011年3月の東日本大震災以降は、東北地方で暮らす多数のフィリピン人とカトリック教会との関係について研究を進めている。